

●京の川の恵みを生かす会の 2022 年度のフォーラムが 10 月 24 日午前 10 時から夕方 17 時まで伏見区中書島にある京都大学防災研究所（ラボラトリー）で開催されました。

この取り組みには鴨川漁業協同組合や保津川漁業協同組合、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所、大阪市漁業協同組合、日本釣振興会などの共同の取り組みとして開催されてきています。私たちやましろ里山の会もその一翼を担わせていただいています。今年はサブスローガンに～淀川水系のアユモドキ復活を考える～として講演会の最初に宇治川でもアユモドキの記録が報告されました。続いて「アユモドキの復活に必要な環境条件」について岩田明久氏が講演されて繁殖期には、水位が短期間に上昇し、泥底で草の生えた陸地が水没してできる流れのない一時的水位が必要だ、続いて仔魚期から稚魚期前半期に孵化したときの環境条件が一か月継続すること、そして稚魚期前半から稚魚期後半には移動能力が増大するにつれて生育条件の異なる様々な環境を含む広域な水域ネットワークであること、そして未成魚から成魚になると泥を嫌うようになり、石の隙間や浮石上の巨岩の下にひそんでいる。11 月中旬から 5 月上旬までは、冬眠する。冬眠環境には湧水が必要である。アユモドキは生活史の中で極めて多様な生活環境を利用しているのでその条件がすべてそろわないと生存がむづかしいと講演されました。また続いて亀岡の仲田丞治さんからの講演では、保全のためにはまず救出活動の必要性が強調されました。そして保全環境整備の必要性、後方で保全を支える多くの人の理解の重要性が求められていること。保全に関して三つのバランス（住民の暮らし、街づくり、保全活動）と三つの連携（地元、行政、NP0）が図られるべきことと講演されました。

午後からは各地の活動報告がされ、やましろ里山の会から山村が竹蛇籠製作設置について、2015 年大井川の原小組さんを 5 人が訪ねて竹蛇籠について学んだことから木津川の 15.2 km に竹蛇籠を設置したこと、そして竹蛇籠の素材真竹の均一な素材を得るための機材づくりまでの仲間の艱難（かんなん）辛苦を披露して、皆さんから大きな拍手をいただきました。

●木津川希少種生育調査業務の秋季の除草作業開始される

2022 年度の受注業務の除草作業で最終の秋季分（40 か所 16000m²）の管理地の全面積を刈り取りが始まりました。10 月 21 日の午後に太田さん森島さん播川さんの三人が最南端の木津川市加茂町の小谷の（木津川左岸）の管理番号 38 番 39 番の除草を完了していただきました。ここは二か所に分かれていて幅 10m で長さ 100m もある巨大面積です。そしてススキや葛が激しく繁茂し背丈をはるかに超す高さまで成長してくる最も困難な場所の一つです。素直な傾斜地が続きますが強烈な斜面と葛の繁茂がものすごく、広い面積と繁茂に悩まされるところです。作業時間は 3 人がかりで夕方まで 4 時間はかかりました。春先の計画的な草刈りとあわせて、夏に自主的除草作業を追加実施しておけば秋季の除草作業は比較的困難を解消できるのではないかと思います。言うは易しで行動が伴わないのがこれまでの実情です。今年夏に「生育調査組」さんに対面の耕作者から通路利用のために成長した葛を刈り取ってほしいとの苦情が寄せられています。

●淀川河川レンジャーの仁枝さんの偲ぶ会が行われました。24 日 長岡京市のパアンビオ

2006 年に淀川河川レンジャー制度が誕生し大阪から辻川さん（防災と干潟での取り組み）枚方から上田君（市民による茨田堤（まんだつつみ）の碑の取り組み）、芥川から中島君（芥川でのアユの遡上の取り組み）、そして桂川から仁枝さん（桂川での防災の取り組み）、木津川から山村などが任命されて、取り組みがはじまりました。仁枝さんは髭のおじさんとして、各地でのイベン

トで大変人気がありました。小さな体で自転車で出かけ腰が軽く活動を応援されてきました。有志から偲ぶ会の呼びかけがあり、短期間の準備で50人もの皆さんが参加されました。

●今年も食味会が行われます 10月30日(日) 正午開会～16時まで 先着順80人

京都大学防災研究所 宇治川ラボラトリー 中庭
参加費 3000円 京の川の恵みを生かす会ホームページから
桂川のアユ 鴨川のコイ 淀川のシジミ
淀川のハゼの唐揚げ 琵琶湖のビワマス

昨年に引き続いて里山の会から「木炭」を燃料としてお買い上げをいただいています(30kg)

●サツマイモ掘り 10月29日10時からご参加下さい

収穫の秋といわれるとき、里山農園ではこれまでイノシシにサツマイモが全滅させられ、収穫がほとんどできませんでした。今年は現在のところ無事なので、サツマイモ掘りを計画しました。参加者全員で30株を掘り起こして、焼き芋などを楽しみたいと思います。掘り起こした芋をお土産に分け分けしたいものです。久しぶりの収穫祭に多くの皆さんのご参加を呼びかけます。

イネ科エノコログサ属4種／親しみ深い植物で「ネコジャラシ」とひとくくりにされることも



(京都市内雲ヶ畑の人自然のニュースから)

●小川芳也さんの松江通信 No. 4

斐伊川は「暴れ川(あばれがわ)」としても有名で、斐伊川誌(建設省中国地方整備局出雲河川工事事務所、1955年発行)によると712年～723年の養老年中に大洪水があり、斐川村、久木、直江村付近に大災害があった。と記録されているのを始まりとして、1866年(慶応2年)8月15日の災害までを68の期間に分類して洪水・災害が整理されています。江戸時代(1603年～1868年)においては、1621年(元和7年)～1866年(慶応2年)の245年間に62回の洪水が記録されています。明治以降(1868年10月23日～)の主たる洪水としては6回が記録されていますので、約17年に1回の割合で洪水災害が発生したことになりますが、昨年(令和3年)7月・8月に発生した支川の洪水は氾濫や内水は氾濫などの中小のものも含めるとかなりの数の水害が発生していたでしょうから、その割合は更に高くなると推察することができます。また、神話からも暴れ川であったことを確認することができますが… この続きは次回に…